

『人生が二度あれば』

津島の居酒屋さん“**出逢い**”での出来事です。

マスター(ママのご主人。魚屋さん)と久しぶりにゆっくり話すことができました。

開口一番

「松井さん、痩せたか？」

「えっ、そうですか。うれしいことを仰る。」

「久しぶりだで、よーわかるわ。去年の夏がマックスだったわなあ。」

ちょっと大げさです。また、マスターと話せたのが久しぶりなだけで、顔を合わせてはいました。

雑談の最中に、ふと、マスターが言いました。

「この頃、思い出す曲があるんだわ。**井上陽水**の曲だけどな。若い頃によ一聞いた。」

それが『人生が二度あれば』です。

父は今年二月で六十五

顔のシワはふえてゆくばかり

仕事に追われ

このごろやっと ゆとりができた

父の湯飲み茶わんは欠けている

それにお茶を入れて飲んでいる

湯飲みに写る

自分の顔をじっと見ている

人生が二度あれば この人生が二度あれば

母は今年九月で六十四

子供だけの為に年とった

母の細い手

つけもの石を持ち上げている

そんな母を見ていると人生が
誰の為にあるのかわからない
子供を育て
家族の為に年老いた母
人生が二度あれば この人生が二度あれば

父と母がこたつでお茶を飲み
若い頃の事を話し合う
思い出してる
夢見るように 夢見るように
人生が二度あれば この人生が二度あれば



なぜ、思い出すのか。
なぜ、若い頃によく聞いたのか。
今聞くと、どう感じるのか。

私からは、何も聞きませんでした。

「松井さん、今日は同じもんつまんで、同じもん飲んだな。」
勧められたカツオは、本当においしかった。